



海よりも山が好きだ。泳げないから水が怖いというのもあるし、一面の大海原よりは山のほうが眺めや草花、植物に変化があって楽しい。昔から高原歩きやハイキングはよくしていたが、本格的に山に登るようになったのは、2009年の西穂高尾根からになる。acitaの会で意気投合した人工内耳の仲間4人、年1回の旅が、いつのまにか山小屋泊まりの夏山登山会になり、山を賑わす大勢の中高年登山者の一員になったのである。

とはいっても、百名山を目指すとか、山岳部のような槍に穂高とはいかず、素人がガイド無しでも無理なく登れる初級レベルの山ばかり、白馬岳、八ヶ岳、常念岳、尾瀬至仏山、燕岳などである。仲間は年齢差10も違うので、最高齢の私とすれば、ザック背負っての登り下りはきつくて、標準コースタイムの3割増しくらいのスピードで休憩しながらゆっくり登っていく。林を抜け、藪の中、階段、岩ゴロゴロの木の根っこを踏み越えて、吹き出す汗をぬぐいながら、ところどころで高山の花に癒され、6時間上り詰めて、やっとのことで見晴らしのよい場所に出られたときの喜びはヤッホー！って叫びたくなる。怪我もせずにようがんばったやん自分！って。

湊かなえの「山女日記」山を巡る連作短編集は、登った山がどんな風に描かれているのかと読み始めたが、ヒロインの恋愛、仕事、家族のストーリーがしっかりしているので面白く読めた。登場する山は妙高山、火打山、槍ヶ岳、利尻山、白馬岳、金時山、トンガリロと多少とも縁がある山が多い。

その中でも、自分が登ったり訪れた山の話は「そうそう、そやったそやった。ここや、ここ」リアルに情景が浮かぶので臨場感満載。湊かなえは実際に山ガールやったのね。そして、何ととっても白馬岳、全く同じコースを縦走した身には、本当に共感できる。私にと

って、いちばん難儀でしんどく、思い出に残る山でもある。誰に聞いても、白馬岳は初心者レベルの特にたいへんな山でもないらしいが、白馬大雪渓を登りきったあとの急斜面で疲労で足が上がらず、ここで動けなくなったらどうしようと半パニック。稜線に出たあとの白馬山荘へと続くゆるやかな道のりも長くて辛かった。それがこの小説ではさらっと書かれていて少し拍子抜け。

山に興味がある人はもちろん、登山経験がない人でも登っている感じがよくわかる。そして小説としても文句なしに面白い。私自身は山で人生が変わるなんてこともなく、山がない人生は考えられないということもないが、高いところに立って見下ろす爽快さ、雲海に浮かぶはるか遠くの山影に心が晴れ晴れする。

本の中で「あなたは富士山派？屋久島派？」という場面がある。私は富士山には登ったことがない。登りたいとも思わない。赤茶けて荒れた溶岩の登山道が延々と続いて緑が無い、花が無い、変化が無い。人だけは多い。日本最高峰のお墨付きを欲しいこともなく、富士山は麓から眺めるに限る。屋久島はぜひ行きたいが、宮之浦岳に登る体力も縄文杉パワーにも興味がないので、紀元杉散策くらいかな。

先日、登山家の田部井淳子さんが亡くなった。無名の低山でもエベレストでも、子どもでも高齢者でも分け隔てなく山を楽しめることを広めた田部井さんの功績は大きい。

来年はもうロープウェイで登れるとこしか行かへんしと言いつつ、槍は無理でも涸沢は行ってみたいなあ。やっぱり、北アルプスの稜線からの眺めは最高だしなあと夢は山野を駆け巡る…

(槍ヶ岳をバックに)



『山女日記』 湊かなえ 幻冬舎